

〈ゲスト研究会・討論〉

英国大学スポーツについて

川部 亮子 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の川部と申します。よろしくお願ひします。これまでは、専門の先生の前でお話する機会があまりなかったんですけども、東洋大学で学生向けに国際スポーツの仕事の話などをさせていただくことがあって、それがきっかけで、今回機会をいただきました。きょうは、どうぞよろしくお願ひします。

現在の肩書ときょうのトピックが、だいぶかけ離れておりますので、まず、自己紹介をして、一体どういうことでこのお話をこれから申し上げるのかということ、ちょっとカバーしたいと思います。

まず、先ほど申し上げましたように、今、2020の組織委員会で、NOC・NPCサービス部という部署にいます。これが、組織委員会の全部署のリストになります。これだけの部署があって、私がいるのはここなんですけれども、NOC、NPCが何かを、皆さんはご存じですか。

鈴木直文：今変換しました。ナショナル・オリンピック・コミッティーと、ナショナル・パラリンピック・コミッティーですね。

ありがとうございます。ナショナル・オリンピック・コミッティー、ナショナル・パラリンピック・コミッティーへのサービスということで、各国、各地域の選手団に対する、組織委員会からのコミュニケーション窓口を担当する部署になります。

これだけの多くの部署があって、それぞれが計画を立てているんですけども、オリンピックが、現状ですと204の国と地域、パラリンピックが182の国と地域がやってきますので、連絡窓口を1カ所に集めましょうということで、それを担当しているのが、私の所属する部署になります。

私は主に、パラリンピックのヨーロッパ大陸の国と地域とのやりとりを担当しているんです。スポーツのイベントではあるんですけども、とてもスポーツ畑の人だけでは成し得ない大会でし

大会プロダクトと経験	クライアントサービス	会場とインフラ	大会サービス	ガバナンス	コマーシャルとエンゲージメント
<ul style="list-style-type: none">・ 競技・ セレモニー・ 都市活動・ライブサイト・ 文化・ 教育・ 聖火リレー	<ul style="list-style-type: none">・ 放送サービス・ IF(競技に含まれる)・ マーケティングパートナーサービス・ NOC・NPCサービス・ オリンピック・パラリンピックファミリーサービス(要人へのプログラム・プロトコール含む)・ 人材管理・ プレスオペレーション・ 観客の経験	<ul style="list-style-type: none">・ エネルギー・ 会場マネジメント・ 会場・インフラ(会場設営・一般的なインフラ含む)・ 選手村マネジメント	<ul style="list-style-type: none">・ 宿泊・ アクレディテーション・ 出入国・ 清掃・廃棄物・ ドーピングコントロール・ イベントサービス・ 飲食・ 言語サービス・ ロジスティクス・ メディカルサービス・ セキュリティ・ 標識・サイン・ テクノロジー・ 輸送	<ul style="list-style-type: none">・ 都市運営調整・ コミュニケーション・コーディネーション・ コマンド・コントロール・ 財政・ 国・自治体調整・ 情報・知識マネジメント・ レガシー・ 法務・ 運営実践準備管理・ パラリンピックインテグレーション・ 計画・調整・ 調達(レート・カード含む)・ リスクマネジメント・ 持続可能性・ テストイベントマネジメント	<ul style="list-style-type: none">・ 大会のブランド・アイデンティティ・ルック・ ブランド保護・ ビジネス開発・ コミュニケーション(デジタルメディア・出版物含む)・ ライセンシング・ チケットティング

て、宿泊であったり、出入国になってくるとビザ、外務省の方のお話であったりとか、空港でどうい
うオペレーションをするかとか、それぞれの専門
の方が集まって行われているものなんです。競技
運営回りの仕事は、私はこれが実は初めてでして、
この前までは、スポーツ政策ですとか、競技力向
上に関わる分野で仕事をしていました。

先ほどちょっとお話し差し上げた方もいらっ
しゃいますけれども、日本スポーツ振興センター
で、足掛け9年ほど仕事をしておりまして、そ
の間に1回退職をして、イギリスのラフバラ大
学に在籍をしていました。その時の経験も踏ま
えつつ、きょうお話しさせていただく調査を実施
した形になります。

だいぶ昔になってしまいますけれども、実は私
はアメリカの大学に行っていて、残念ながら日本
の大学に通ったことがないんです。なので、き
ょうはあまり比較という観点ではお話し上げら
れないんですけれども、イギリスの大学スポー
ツの仕組みと、その実態についてお話しをしたい
というふうに思っています。

調査の背景

最初に、ちょっと恐縮ながら申し上げておきたいのは、今回お伝えするデータが、かなり古いということ
です。前職でおこなった調査なのですから、実施年度は2016年、17年の話になります。今の時代、数年たつと、文字どおり時代も
変わってしまいましたので、ちょっとデータ自体は古いかもしれないんですけれども、ご了承ください。きょうお話しするデータは、全て調査主体
であったJSCに帰属しますので、その旨をご承知おきいただければと思います。

この調査を行った当時は、内閣から「日本再興
戦略2016」というのが出た時で、その中で、スポー
ツの成長産業化がうたわれていました。その方針
が示されたことで、スポーツ庁が中心になって、
当時は仮称でしたけれども、日本版NCAAを作
ろう、大学スポーツをビジネス化して振興してい

こうじゃないかという話が、ちょうど持ち上がった
時期だったんです。

大学スポーツの振興に関する検討会議というの
が、ちょうど設置されたタイミングでしたので、
目的としては、ここに知見を提供することを目指
けて、イギリスで文献調査およびインタビューを
おこなっていたというものになります。

きょうは、イギリス大学スポーツの統括組織で
あるBUCSという組織について、概要と、柱と
なっている2つの事業、スポーツプログラムと
人材育成プログラムについてお話しをして、それ
からそのプログラムを踏まえて、イギリスで大学
がどのようにスポーツを運営しているのかという
一例として、ラフバラ大学のお話をしたいと思っ
ています。

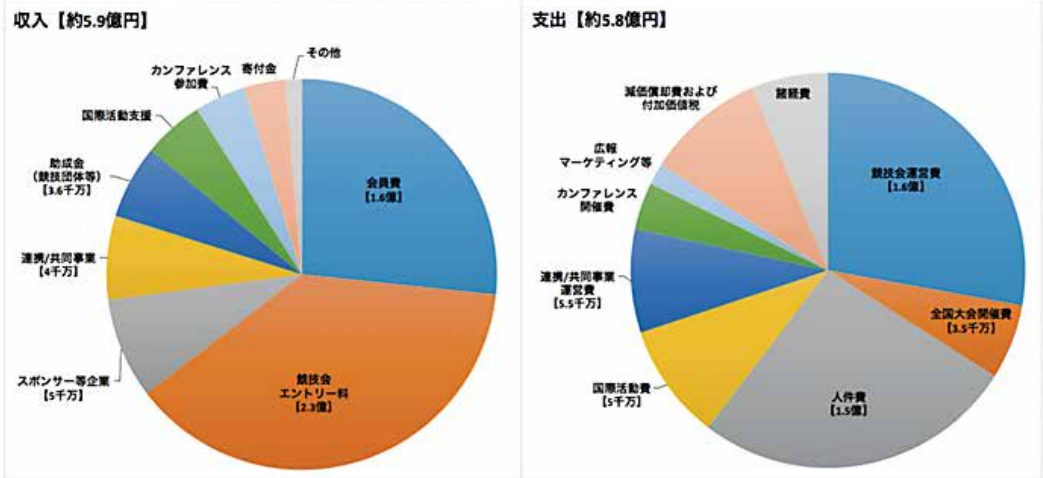
BUCSの概要

早速、BUCSとは何かという話を差し上げま
す。ちなみにBUCSのことを聞かれたことがあ
る方とか、実はもう知っているんだけれども、と
いう方はいらっしゃいますか。ブリティッシュ・
ユニバーシティーズ・アンド・カレッジズ・スポー
ツ・(British Universities & Colleges Sport)と
いう団体の略称で、BUCSというふうに呼ばれ
ています。大学および専門学校を含めた高等教育
機関の全てを対象としている組織です。

BUSA (British Universities Sports Associa-
tion)と呼ばれていた大学スポーツの運営組織と、
USC (University College Sport)と呼ばれてい
た大学スポーツを運営するスタッフのネットワー
ク、2つに分かれていたんですけれども、それを
統合して、BUCSと呼びましようとなったのが
2008年です。ですので、調査した当時は、およ
そ8年、9年ぐらいたったタイミングになります。

BUCSは、国全体の大学のスポーツを統括し
ているという意味では、アメリカのNCAA (Na-
tional Collegiate Athletic Association)に似てい
る立場のものではあるんですけれども、非営利の
団体です。観戦チケットの販売とか、いわゆる

BUCS 2015/16年度 収支内訳概要



BUCS[2016]「2015/16 Annual Review」をもとに筆者作成 ※1ポンド=150円で換算

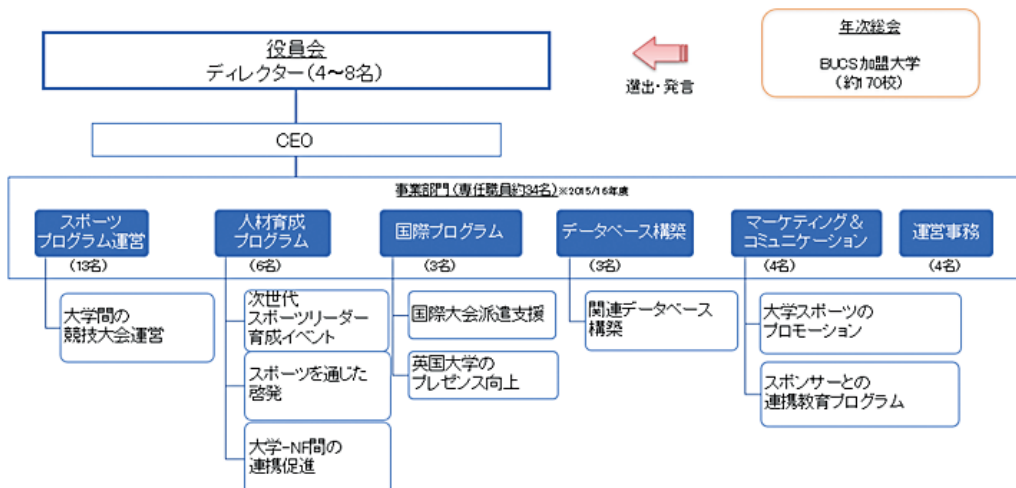
NCAA がやっていて、日本がやろうと思っていたことは、BUCS は全く行っていませんでした。チャリティー団体になりますので、収益は基本的には上げないというスタンスであって、公共の利益を目的にしている団体です。会員制の団体なので、収益のおおよその基は会員費になっています。

BUCS の目的は、スポーツを通じた高等教育機関における、学生生活の質の向上ということで、競技参加の機会だけでなく、それを運営する大学スタッフや、スポーツ自体の競技性の向上を含

めて、大学に通っている大学生が、より良い生活を送れるようにしていきましょうということを目指していました。

先ほど申し上げたように、日本が大学スポーツを産業化しようという話をしているところに、この結果を持って行くには、ちょっと方向性が違い過ぎたので、どこにも行かなかったというような調査になります。なので、ここで日の目を見られて、非常に光栄です。

まず、BUCS がどういう体制で事業をおこなっているか表した図になります。



先ほど申しあげましたように、会員制の組織ですので、まず BUCS の加盟大学があります。ここから役員、ボードメンバーになる人たちを選んで、この人たちが指名する CEO が 1 名、これの下にフルタイムのスタッフがいる組織です。

これを調べた当時は、CEO を含めてフルタイムスタッフが 34 人いたので、全国を見ていると、比較的小規模なのかなとは思いますが、そのような体制でありました。当時役員会の会長さんは、アバディーン大学のサー・イアン・ダイアモンドという統計学の先生で、領域にかかわらず大学を取りまとめる、ユニバーシティ UK の政策ネットワークという会長も務めている人なので、スポーツに特化した先生ではないのですが、大学というもののネットワークを、非常に詳しく知っていらっしゃる方なのではないかという推察がされます。

その下に指名されていた CEO の方は、調査を行った当時は着任されたばかりだったのですが、前職で、ニューキャッスル大学と、コベントリー大学で、学生向けのスポーツとか、レクリエーションのプログラムを企画して運営するという部署のディレクターを務められていました。現場をよく知っている方が CEO として着任されたという形です。

加盟大学に対して、BUCS は大きく 3 つのサービスを提供しています。BUCS の体制の図をご覧ください。一番最初がスポーツプログラム、大学間の競技大会の運営を提供したり、次に人材育成プログラムとして、スポーツを通じて人材を育成していこうということ。最後にイギリスでは、ヨーロッパでの大学スポーツ競技会ですとか、ユニバーシアードへの派遣を BUCS が行うという形になっているので、それを時期に応じておこなうというセクションがあるんです。

これら 3 つを行うために、データベースの構築をするチームが 1 つあり、それから、対外的に第三者と提携をして、大学スポーツのマーケティングやプロモーションをおこなっていく企画のチームが 1 つ、それらを行う運営事務のチー

ムが 1 つという形をしています。

先述の BUCS 2015/16 年度 収支内訳概要のグラフを見ていただければと思います。先ほど申しあげましたように、原則的には会費と、競技へのエントリーが財源になっていて、分かりやすく競技会の運営費と人件費に割り当てられているという形です。放映権ですとか、観戦チケットという NCAA のおおよその財源は、BUCS には全くありません。

BUCS の CEO にインタビューをする機会があったのですが、そこで「観戦チケットを売るとかいう話は全然ないの」という話を聞いたところ、競技パフォーマンスは、観戦料を徴収するレベルはないので、そういう発想は全くありません、ということでした。ただ、今どき簡単にウェブでネット配信ができるのですが、選手の友人やご家族に見せるためのシステムは作ってもいいかなというふうに思っているけれども、お金も、というのは、ちょっと現実的ではないかなという話がありました。では、BUCS の会員の仕組みと、主軸となっているスポーツプログラムと人材育成の事業について、個別に見ていきます。

BUCS の事業詳細① スポーツプログラム

BUCS の会員なんですけれども、2 つに分かれていて、正会員と準会員というのがあります。フルメンバーシップの正会員は、役員を選ぶ投票権というのがあって、先ほど組織図で見たサービスを全て受けることができます。正会員の会費は、大学の学生数と、学生が今年参加したい競技種目数に基づいて算出されるので、毎年変化する可能性があります。それから、大学によっても当然違います。

一方で、準会員というのがちょっと特殊で、ロンドン内に住所を持つ大学にのみつくられたリーグ（ロンドン・ユニバーシティーズ・スポーツ・リーグズ）に参加するための仕組みになっています。ここに参加するのは、競技数がかかなり限られていて、場所もロンドン市内で行われるので、自

分たちで、そういう体育館を持っていない大学をまとめて、ここを借りたので、一斉にみんな来て、いっぱいやって一回解散、次に、またこの日、というような、ちょっと正会員が入っている仕組みとは、少し別になったリーグがあるんですけども、そこにだけ参加をするという形になります。

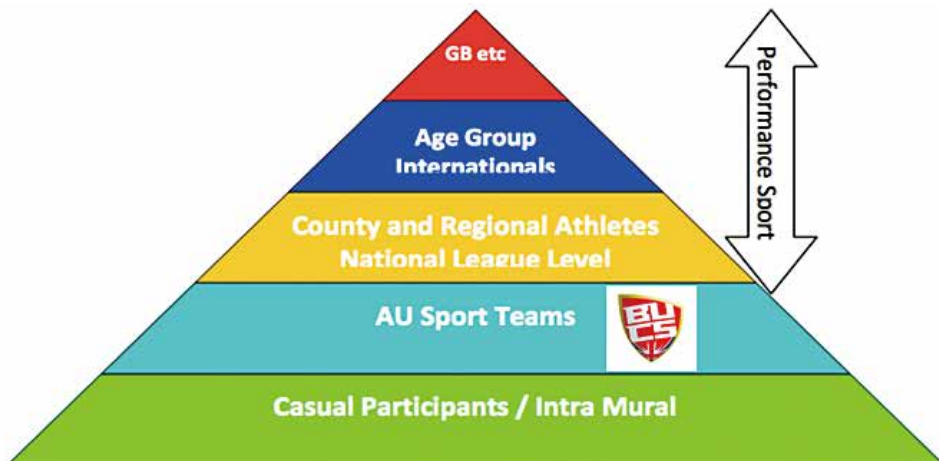
これは固定で、参加費が決まっています。2016年に調べた時点では、加盟は全部で、正会員と準会員を合わせて171だったんですけども、その中の大半が正会員になります。恐らく先生で研究されていらっしゃる方もいらっしゃると思うので、もし解釈が違ったらご教授いただきたいんですけども、イギリス全土（イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドを含む）で、高等教育機関として認可されている機関は幾つか種類があります。その中で、学位の授与が認められている機関、いわゆる大学というのはリコグナイズドボディーといわれています。一方、例えば専門学校のようなところなんですけれども、将来大学に行きたくなったときに互換ができる、大学レベルのクラスを幾つか教えている、でも学位は授与できないという機関は、リステイドボディーというふうに呼んでいます。リステイドボディーは、全国で600以上あるんですけども、リコグナイズドボディー、いわゆる大学は、当時162あって、そのうちの140が正会員に入っていましたので、実におよそ9割の大学が参加し

ていたということになります。残りはリステイドボディーから参加しているという、すごく少数の専門学校になります。

これらの大学が参加しているスポーツプログラムと、人材育成プログラムを見ていきたいと思えます。最初に、スポーツプログラムについてです。先ほど、競技レベルがそこまでのレベルじゃないので、チケットは売らないという話がありましたけれども、そもそもイギリスのスポーツ界で、BUCSがやっているのはどのレベルなのかという話をしたいと思います。

パフォーマンススポーツなんかだと、こういう三角がよく出てくるんですけど、一番上が、いわゆるチームGBという、オリンピックに出るような、国代表の選手。その下が年代別の国代表、アンダー幾つみたいなもので、インターナショナルレベルのパフォーマンスレベル。さらに下に、国内で地域を代表して戦うようなレベルの選手がいたとすると、BUCSがやっているのは、AUスポーツチームズと書かれている部分になります。

日本とちょっと違うのは、この上の3つのレベルに、スポーツレベルでは入っているんですけども、年代的には大学生だというような場合が考えられます。大学に所属しているエリートアスリートは、日本ですと、部活の先生がナショナルコーチであって、大学自体で強化をするとか、いろいろと政治的に難しい状況になることもあるん



ですけれども、イギリスの場合は、すごくきっぱりとしています。大学はあくまでも学業をするための在学場所であって、アスリートの強化とか育成の活動は、UK スポーツや競技団体という管轄の下で行われているので、BUCSが行っている大学スポーツは、競技力向上には関与はしていないんです。あくまでも競技機会をつくっていきましようということに、非常に特化しています。

BUCSに参加するためには、部活である必要があるんですけれども、大学がその存在を公認しているという意味では、日本でいうところの体育会にあたるんだと思います。でも競技レベルは競技によって結構さまざまで、例えばラグビーだったりサッカーだったり、イギリスが強そう、よくやる機会がありそうというのは、競技性が高くて、大学に入ったときにトライアルをやって、1軍とか、何軍にも入れなかった、残念でした、みたいな子がいたりすることもあります。一方、例えば野球とか柔道なんかで、そういうことに今まで触れてこなかった、でもせっかく大学生になって、新しいことができるから、ちょっとやってみたいから入ってみる、みたいな感じで入ってくる人もいます。それが全てBUCSでカバーされるということになります。なので、ものによっては日本の部活である場合もありますし、ものによってはサークルと、ちょっと質が似ているというのも、全て含まれています。

ですので、このような状況の中で、大学生が自力で実力の伯仲する相手を探し出して、継続的に試合を組むということは、非常に難しい可能性があります。ここでBUCSが威力を発揮して、各チームの対戦成績を統括的に記録して、実力把握をおこなった上で、この大学の2軍とこの大学の5軍が同じぐらいだから、同じリーグにしてあげようというように、取り仕切ったりできる。その意味で、BUCSがいつているスポーツ参加の機会を創出しようとか、健康的な競争をすることでスポーツの面白さを維持して、スポーツ参加の機会を継続的に創出しようじゃないかという形になっています。

BUCSの大会フォーマット、BUCSがそれをどう実施しているかという話になるんですけれども、まず、そもそもBUCSに誰が出られるのかという話です。イギリスは基本的に推薦入学とかがないので、皆さん、どれだけ素晴らしいエリートアスリートでも、基本的にはその大学の学科の入学基準を満たしていないと入れないという事実があります。それがまず、出場規定の1つ。

その次に、大学とか学校によって数は違うでしょうけれども、その学科で正規学生と認められる単位数を履修しててください、という2点です。なので、成績についての問題は、全くありません。これらを満たしている学生が参加できて、171の大学間、その競技の中で優勝を決めたりということも当然あるんですけれども、年間を通して、大学単位で試合ごとにポイントを獲得して、最終的に年間総合の優勝を競うというのが、1年間のフォーマットになっています。

BUCSが扱っているのが、実に52競技ありまして、陸上だったりサッカーだったり、バドミントンだったり、みんながやっているようなものから、最近東京オリンピックの競技になりましたクライミングだったり、馬術。それからオリエンテーリングとか、あまりスポーツといわれてばっと思いつかないようなものですか、車いすバスケなどのいわゆる障害者スポーツ、パラの競技も5~6個あって、陸上、水泳、バスケ、テニス、あと幾つかあったと思います。これを調べた当時は、年間で合計10万人の登録があって、BUCSの提供するスポーツプログラムに参加をしました。

先ほど、イギリスに何年か滞在された先生たちがいらっしゃるというふうに伺いましたけれども、水曜日の午後はお休みじゃありませんでしたか。イギリスの大学は、水曜日の午後に授業がないんです。どうやら伝統的なものようで、水曜日の午後に、課外活動をぜひやりましようということで、おおよその大学がもう水曜日の午後には授業をやりません、というのが記載されているらしい。実際ラフバラ大学とかはそうだったんですけれども、必ずしもスポーツをやらなくてもいいん

MEN'S BASKETBALL 2016-17																
プレミアリーグ	イギリス北部								イギリス南部							
	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8
	1 Northumbria 2 Durham 3 Worcester 4 Loughborough 5 Salford 6 Newcastle								1 East London 2 Southampton Solent 3 Brunel 4 Oxford 5 Bath 6 LWE							
Tier 1	スコットランド	北アイルランド		イングランド中部				西イングランド				南イングランド				
	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8
	1 Edinburgh 2 Glasgow 3 Strathclyde 4 Heriot Watt 5 Aberdeen 6 Aberystwyth	1 Leeds Beckett 2 Northumbria 2 3 UCLAN 4 Sheffield Hallam 5 MMU (Manchester) 6 Huddersfield	1 Derby 2 Oxford Brookes 3 Nottingham 4 Worcester 2 5 Birmingham 6 Birmingham City	1 Bournemouth 2 Exeter 3 Cardiff 4 Plymouth 5 Southampton 6 Swansea	1 London South Bank 2 Essex 3 Middlesbrough 4 UCL 5 St Marys 6 Northampton											
Tier 2	2A		2A		2B		2A		2B		2A		2B			
	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2		
	1 Dundee 2 Edinburgh 2 3 Stirling 4 St Andrews 5 Edinburgh Napier 6 Robert Gordon	1 Chester (Chester) 2 Liverpool 3 Manchester 4 Liverpool John Moores 5 Bangor 6 Edge Hill	1 Teesside 2 Sheffield 3 Sheffield Hallam 2 4 Leeds 5 Northumbria 3 6 Durham 2	1 Loughborough 2 2 Warwick 3 Nottingham Trent 4 Staffordshire (Stoke) 5 Aston 6 Wolverhampton	1 Coventry 2 Anglia Ruskin (Cambs) 3 Bedford (Luton) 4 Leicester 5 East Anglia 6 Cardiff	1 Bristol 2 Bournemouth 2 3 Mansions 4 Winchester 5 Bristol 2 6 Gloucestershire	1 Bath 2 2 Cardiff Met 3 UWSI 4 Cardiff 2 5 Swansea 2 6 Cardiff Met 2	1 Surrey 2 Chichester 3 Royal Holloway 4 Sussex 5 Buckingham New 6 Reading	1 London South Bank 2 2 City 3 Imperial 4 Greenwich 5 London Met 6 East London 2							
Tier 3	3A		3A		3B		3A		3B		3A		3B			
	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2		
	1 Glasgow Caledonia 2 Glasgow 2 3 Dundee 2 4 Strathclyde 2 5 Heriot Watt 2 6 Queen Margaret	1 Bolton 2 Lancaster 3 Manchester 2 4 Keele 5 MMU 2 (Chester) 6 UCLAN 3	1 Sunderland 2 Bradford 3 Hull 4 Leeds Beckett 2 5 York 6 Newcastle 2	1 Worcester 3 2 UC Birmingham 3 Birmingham City 4 Coventry 2 5 Nottingham 2 6 Birmingham 2	1 Bedford 2 Bedford 2 De Montfort 3 Loughborough 3 4 Oxford 2 5 Cambridge 2 6 Nottingham 3	1 Southampton 2 2 Southampton 3 3 LWE 2 4 UW TSD Swansea 5 Aberystwyth 6 Exeter 2	1 Brunel 2 2 Kingston 3 Portsmouth 4 LSE 5 Queens Mary 6 Metway 7 Kent 8 Exeter 2	1 Brunel 2 2 Kingston 3 Portsmouth 4 LSE 5 Queens Mary 6 Metway 7 Kent 8 Exeter 2								

です。いいんですけども、授業は少なくともないことが決まっているので、これを BUCS ウェンズデーというふうと呼んで、水曜日の午後リーグを行うことが、年間を通してあります。なので、BUCS にとっては都合の良いこと、わざわざ大学の授業をどうこうしてくれと交渉する必要は、あんまりない。

団体競技は、大体、この水曜日に行われます。リーグ戦の場合は総当たり戦になるので、リーグをつくってその中で、6校とか5校とかが、総当たり戦をします。それが大体水曜日の午後に行われるんですけども、個人競技の場合は、BUCS ウェンズデーにやる時もありますし、週末に行う、トーナメント制のものであったりとかですと、週末に朝から晩までやって、夜に優勝者が決まるというような形で行うこともあります。なので、競技と競技レベルによって少し違うものもありますが、基本的には水曜日の午後といったら BUCS という感じのしつらえになっています。

同じようなレベルのチームと対戦をさせてあげるために、BUCS がデータを取ってリーグを組んであげるとい話を先ほどしましたけれども、イメージとしては、Jリーグとちょっと似ています。

これは、男子のバスケのリーグ表を、ちょっと貸してもらったものなんですけれども、これが一番競技レベルの高いプレミアリーグ、その下に、ティア1、ティア2、ティア3、下はティア5ぐらいまであったと思います。さらに、イギリス全体で地域ごとに分かれていて、イギリス北部のプレミアリーグ、イギリス南部のプレミアリーグで、これの下に、スコットランド、北アイルランド、イングランド中部があって、西イングランド、南イングランドとなっています。ここで1年間戦って、強かったところが繰り上がったりとか、繰り下がったりとかいうような感じで入れ替わっていて、さらにこのティア2からティア1に繰り上がっていくこともあれば、ティア3から2に上がってくることもあります。年間を通してどうだったかということで、昇格と降格があるという形になります。

当然、学生スポーツですから、卒業してしまう子がいれば、入って来る子もいますので、戦力が大きく変わることについては、事前に何らかの形で申告があります。去年はこいつがいたから強かったんだけど、あいつがいなくなっちゃうから、ティア1に上がっちゃうのはちょっとつ

らいかもしれない、みたいなことは、申告があれば、BUCS のほうで考慮して、調整をすることができると聞いています。

組織図で、データベースの構築にも、少し触れましたけれども、これらの全試合の結果、これは男子バスケのごく一部で、これだけの数がある、しかも、この表の中に、3 チームを持っている大学とかが幾つかあるんです。ラフバラ大学とかも、ラフバラ 3 までがここにおいて、多分ラフバラ 5 ぐらいがティア 5 の中にいるんだと思うんですけども、そういう大学もあれば、ティア 5 に 1 チームだけがいるというような大学も当然あります。この膨大なデータを管理して追いかけていって、統合していくデータベースを作っているのが、BUCS のシステム構築のチームになります。

これらをどういうスケジュール感でやっているかというのを示したのが、この図になります。

分かりやすく、年度が終わったところから始めたいと思います。夏休みが始まります。夏休みの間に、来年どうするかという登録の手続きを済ませるという作業があります。登録の手続きが終わりましたら、BUCS のほうで、それを基にリーグや試合を組んで、1 年間を通して全ての競技をここで発表します。次に大学がそれを見て、このタイミングは駄目だとか、大学の体育館は空いていないということが分かっていたら、既に生まれ

ている相手と協議をして、相互で確認が取れば、BUCS にこういうふうに変えたい、と連絡できます。

BUCS のほうは、スケジュールが変わったのであれば、確認をすれば済む話なので、そのあたりはかなりフレキシブルにやっているという話がありました。それに基づいて会場を手配したりとか、試験などで日程をずらしたりする必要があれば、この間に行って、最終的にそれでいきましょうと大まかに決まったら、登録料をここで支払います。

そして、年度が開始します。そうすると、シーズンが始まり、決まっていたカレンダーに基づいて、プレミアリーグは、先ほど見たように数が少ないので、最初に終わります。その次がティア 1、ティア 2 というふうには、どんどん終わって行って、最後にプレーオフ、最終的な決勝戦が各競技で行われて行って、シーズン終了、大学も一緒に終わります。で、また最初に戻るといような形になっています。

例えば試合後に、あいつがずるをしたとか、あの審判に納得がいかない、みたいなことがあれば、それは BUCS に報告をして、かくかくしかじかというような話をしますし、ホームゲームでは、基本的には審判とかオフィシャルは、ホーム側が手配をするということになっているんですけど



も、自分たちのリソースで、準備できないということがあれば、競技団体に連絡をして、誰かちょっと手伝ってくれないか、と BUCS を通じて相談することができます。

これがスポーツプログラムの一連の流れでした。これに関連しつつ、BUCS のもう一つの、特に NCAA は、ここまで注力をしていないんじゃないかというふうに思われるのが、人材育成のプログラムの部分です。

BUCSの事業詳細② 人材育成プログラム

ちょっと話がいったんそれるんですけども、イギリスの高校生が大学を選ぶとなったときに、見るのは、当然学術レベルがどうか、どの大学がいいとかいうのは、日本と非常に似ているんですけども、スチューデントサティスファクションというファクターが非常に強くて、大学を卒業するタイミングで、卒業する学生が、自分は大学生活に満足したのかどうかみたいなことを調査する、結構有名な調査が2つほどあるんです。

そのスチューデントサティスファクションを気にする傾向が強くて、スチューデントサティスファクションで何位でしたということを、大学は大々的に、それこそウェブサイトの最初のページに載せたりしています。

そのスチューデントサティスファクションが、大学の授業に満足したというだけではなくて、オーバーオールで見っていくので、例えば寮生活が楽しかったとか、大学のロケーションで、自分は楽しく生活ができたのだというようなことも、全てひっくるめておこなわれるわけなので、大学の授業をどれだけ頑張っても、他の部分で底上げができなければ、そこは包括的にいい点にならないというような部分があつて。

そういう意味で、スチューデントエクスペリエンスというアカデミックの部分だけではなくて、大学生が、大学に所属している間に生活をして経験をしていくもの全てにおいて、できる限りのサービスを提供していきましようという風潮が、

比較的強いと思っているんです。

次に、今後のスポーツと人材育成プログラムに続いていくんですけども、イギリスの大学は、1997年までは無償、タダだったんです。ということは、今大学に通っている学生さんたちは、ご両親は大学のお金を払わなくてよかった世代。現在は、大学にもよるんですけども、多分、大体1年間に130万円ぐらいの授業料を徴収されているんです。

これに対して、イギリスはアメリカと似ていて、親が払ってくれるという仕組みはあまり彼らにはないので、自分で払うという観点から、自分はこのに入ったら、将来的に幾ら稼いで、いつこのローンを解消できるんだろうという、仕事につながる観点が、非常にシビアにあると思っています。

それはイギリス全体で、多分、風潮としてあつて、特にこんなことまで調べるんだと思ったのは、2017年にイギリスの教育省が、業界別に、卒業後5年間で、どこの大学の何学部を出た人はこれだけお金を稼ぎましたというランキングを出したんです。

それが、オフィシャルスタティスティックス (Official Statistics: Employment and earnings of higher education graduates) というデータなんですけれども、LEO (Longitudinal Education Outcomes) と呼ばれるデータを使った、エデュケーションアウトカムを追いかけるといような方法を使っていて、どこの大学を出た誰々が、この業界に勤めたら、結果的に5年間でお給料は幾らでしたというのを、ずっと追いかけていたようなんです。政府からその発表が出るほど、みんなが重要なものだと思っているんだというのが、私にとってはちょっと衝撃だったんですけども。

大学に行って学位をもらうというのは、誰も彼もがやることなので、それ以外のところで、自分は、じゃあどういふふうに、この経験を売れるんだろうという観点が、学生も、それを提供する側にも、観点として非常に強い部分があるのかなというふうに思います。

これが、BUCS にどういうふうに関連してくるかという話なんですけれども、シェフィールドハラム大学に、スポーツ・インダストリー・リサーチ・センターというのがあって、ここが、行動の価値とか経験の価値を数字に表すことについて、非常によく研究されている。例えば、ボランティアをやるのは一体幾らなのかというような研究をされていたりするんですけども、そのチームと BUCS が共同調査を行って、スポーツに関わった学生さんたちが、エンプロイアビリティ、就職ができるかどうかということについて、どれぐらい価値があるのかというのを研究したんです。

BUCS としては、大学側にスポーツをやると、これだけエンプロイアビリティが上がるんだということを数字で見せて、だからもっと一緒にやっていきましょう、と見せることができる取り組みをおこなっていたことになります。

そういうことを、具体的に BUCS はどうやっているかといいますと、BUCS ウェンズデーというのは、先ほど申し上げたように、水曜日の午後に定期的にやっているの、プログラム化しやすいんです。ポジションを1つつくって、あなたの役割はこれです、1年間、これですとやっていきましょうと仕組み化しやすい、トレーニングもしやすいし、人を成長させる、非常に使いやすいプラットフォームです。大学に幾つかお話しは聞きましたけれども、むしろそうやっていかないと回らないというような現状があります。

そうでないところには、BUCS 側からサポートとして、こういうふうにしたらどうですかとか、ここの部分ができないのであれば、じゃあ、そこは BUCS が受け取りましょうか、というような相談をすることもできるということでした。

大学によって、BUCS にどれぐらい、スポーツというものに対して、どれぐらい価値を見出して使っていくか、例えばキングス・カレッジ・ロンドンみたいな、スポーツ以外で学生を呼べるような大学というのは、そこまで頑張るスポーツをやる必要はないんです。それでも、BUCS ウェンズデーを運営する子たちには、ボランティア

という名前ではなくて、例えばスポーツコーディネーターであったりとか、コーチアシスタントとかいうポジションの名前を付けることで、彼らが、就職するときに履歴書に書ける。責任を持って自分が行った職務であって、有償だったか無償だったかであるかは、正直、あまり重要なことではなくて、こういう役職をやりました。それは、大学の学位をもらう以外に、自分が大学に認められているポジションだったんですと表現できる、その場を生み出すことができるというのは、非常に大事なことだと思ってお話されていました。

先ほど申し上げた背景があるので、学生側からも、役職と責任を持って実務の経験を得ることに対する需要が非常に高いので、例えそれが無償であっても、ポジションが埋まらないで非常に困っているという話は、基本的にはない、何かポジションがあったら、もちろんやりたくないような子の中には当然いますけれども、そこが埋まらなくて、この仕事が進まないというのは、めったに聞かないというお話でした。なので、こういうふうにしつらえてあるので、学生の皆さん、ぜひこれをやろう、君たちはこれを将来に生かせるし、僕たちもこの職が埋まってくれるのが必要だ、というのがうまくかみ合っているという形です。

それから BUCS が提供してあげている機会としては、競技団体との連携の幾つか事例があるんですけども、例えば、バレーボールはイギリスではそこまで競技人口の多い競技ではないんです。なので、バレーボールの競技団体が競技人口を増やすという活動をしなくてはならない。それをおこなうのに、体験競技会みたいなのを行うんですけども、それを大学でやろうと思うという話をしたときに、例えば、BUCS を通じて、BUCS に参加しているバレーボールのチームの子たちに相談をして、あなたたちの大学でバレーボールの体験会をやりたいんだけど、誰か、この企画をリードしてくれないかと言って、その子を競技団体と、必ずしもインターンとは限りませんが、その子が企画をした競技団体のイベント

に行つて、大学生を相手に一緒にやるというコラボレーションの仕方があります。

幾つかの事例では、あまりにも、その役職を与えられた子が良かったので、そのまま就職をしてしまったとか、もしくは、必ずしも雇つてあげられるだけの財力がなくても、その役職は、恒常的なものにして、彼が卒業したら、次の年も誰かを必ず指名して、君はその子を育てるんだよ、みたいな感じで、競技団体は必ずしもそれに100パーセントを注がなくても、大学生が、自分たちがどういうふうに資質を向上できるのかという観点で、いい機会だと彼らが捉えて成長をしていくにつながるという話がありました。

一番分かりやすい人材育成プログラムは、これを皆さんは想像されたと思うんですけども、就職セミナーの実施ということで、やはり統括団体として、ネットワークとかコネクションがあるということから、イベントを実施することができます。私も何個か参加させてもらったんですけども、BUCSから卒業して行って、今はどこそこ団体の偉い人になっているとか、ラグビーワールドカップで何かをやったという方にスピーカーになってもらって、大学時代の時にこういうふうにやったことが、今の自分のことに生きているというような、職業セミナーに似ていると思うんですけども、そういうイベントを実施する。

それだけではなくて、その地域にいるBUCSウエズデーを運営しているような子たちを一斉に呼ぶことができるので、そこで、例えばインクルーシブスポーツを運営したいんだけど、そのやり方が分からない、君たちのところは どうしている？ というような相談を学生同士でしたりとか、今の時代はFacebookで友達になって、何かちょっと電話して教えてもらいたいなこともできますので、そういう学生同士のネットワーキングができて、情報交換をして。

それこそ、うちの大学の授業だけでも、そつちもそれぐらいのレベルなの、みたいな話ができると、どんどん客観性を持って、自分のスチューデントエクスペリエンスを見ることができると、

将来出て行ったときに、自分は、今ここら辺のレベルなんじゃないかということが頭に入るという意味では、非常に大学生にとっては有意義な場所なのかな、と思いました。

そういうことを定期的に開催していて、この調査をした時は、年間で約600名の学生を対象に、競技団体を含む50の関連組織も出席して、セミナーを定期的に行っていたということでした。

ここまでは、BUCSがどういった機会を提供して、どういったプログラムを展開しているかという話でした。これから、逆にそれを受け取る大学側で、これらの機会を使ってどういったふうに進んでいるのかという話をできたらと思います。ここで、ちょっと観点を変えて、今度は大学側の話に入ります。

英国大学でのスポーツ：ラフバラ大学の場合

ラフバラ大学について、ラフバラ大学に行かれたことがある方は、どれぐらいいらっしゃるのでしょうか。名前を聞いたことがある方はいらっしゃるでしょうか。すごいですね。何かスポーツに関連する人じゃないと、ラフバラを知っている人は、まずいない。そうしたら、多分おおよそのことは、皆さんはひょっとしたらご存じかもしれませんが、イギリスの総合大学で、最近かなり頑張っていて、全英でも、ちょっといいランキングを頂くようになっているようですけれども、スポーツの教育、研究、それからパフォーマンスのいろいろな観点がありますけれども、おおよそで有名な評価を頂いている大学です。

学生数は、学部から博士まで合わせて、おおよそ1万8,000人ぐらい、イギリスでいうと、大体中規模です。近くにあるノッティンガムの大学は、3万とか学生さんがいるので、すごい大きいんですけども、ラフバラ大学はイギリスの中では、中規模で、デザインとか、本当にスポーツに関係ないことでも有名なので、そういうことがやりたい子も入ってくる学校です。だから、大学にこれから行く人向けの掲示板には、私はスポーツ

BUCS総合順位						
	2017	2016	2015	2014	2013	2012
1	ラフバラ	ラフバラ	ラフバラ	ラフバラ	ラフバラ	ラフバラ
2	ダラム	ダラム	ダラム	ダラム	ダラム	ダラム
3	エジンバラ	エジンバラ	エジンバラ	バーミンガム	バーミンガム	バーミンガム
4	ノッティンガム	ノッティンガム	バース	バース	バース	バース
5	エクセター	エクセター	バーミンガム	エジンバラ	エクセター	リーズベケット
6	バース	バーミンガム	エクセター	エクセター	エジンバラ	エジンバラ
7	バーミンガム	バース	ノッティンガム	ノッティンガム	ノッティンガム	エクセター
8	ノーザンプリア	ノーザンプリア	ノーザンプリア	ノーザンプリア	リーズベケット	マンチェスター
9	ニューカッスル	ニューカッスル	オックスフォード	リーズベケット	マンチェスター	ノッティンガム
10	カーディフ	オックスフォード	リーズベケット	マンチェスター	ニューカッスル	ニューカッスル

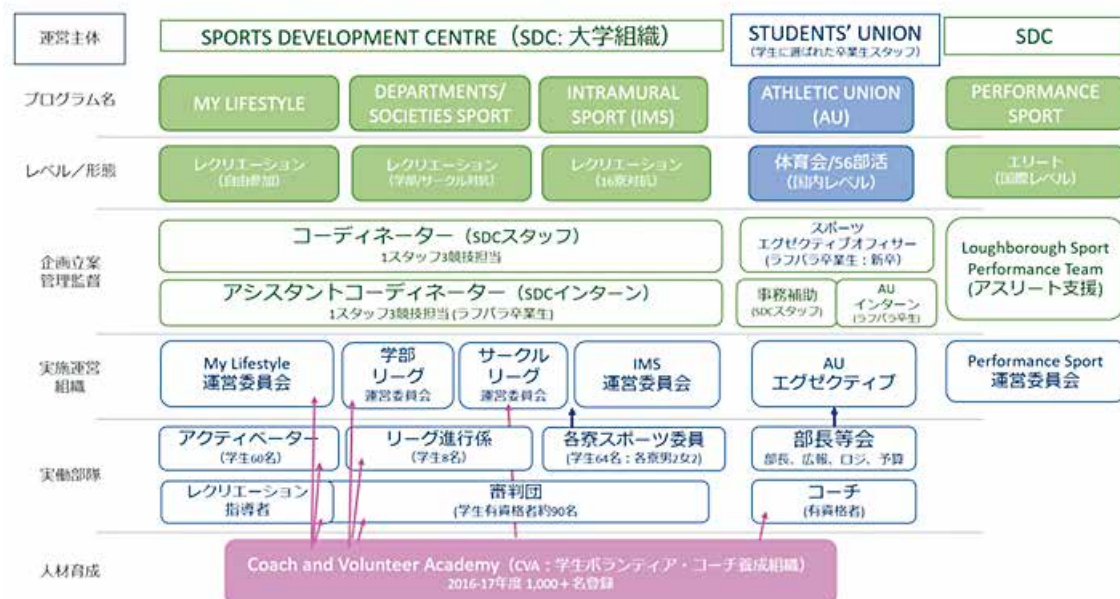
ができないがラフバラに入学して大丈夫か、みたいな質問がよくあります。スポーツ学部以外にもたくさんの学部がありますので、必ずしもみんなスポーツが好きというわけではありません。

大学スポーツの競技成績ランキング、先ほど言ったように、BUCSは比較的最近の出来事なんですけれども、その前から大学スポーツというものはあったので、今年、どうやら40年間首位ということで、他の学校からしてみると、非常に邪魔という大学なんですけれども、団体競技だけを見ると、ダラム大学のほうが強いという。個人競技でラフバラ大学が荒稼ぎして、総合で1位

みたいなことがあるんですけども、ダラムが、今、団体競技に非常に力を入れていて、ちょっと、いいとこの方が、ダラムによく行きやすいんです。なので、大学によっていろいろカラーがありますけれども、例えばボートとか馬術とか、そういうので強いというのがダラム大学で、ラフバラ大学も総合はまだ1位です。

ラフバラ大学の特色として、大学を挙げてスポーツに力を入れるというのを、対外的に非常に明言していて、全学生の75%に、週3回活動に参加してもらうというのを目標として掲げています。これはかなりアンビシャスな数字なんですけ

ラフバラ大学におけるスポーツ機会の創出モデル



れども、それだけの機会を提供しなくてはならないので、それをどうやってやるのか見たいと思います。BUCSに参加するだけでは、明らかに75%には達しない。

ちょっと、かなり細かい話なので、全体を、まず説明したいと思うんですけども、緑が、大学のスタッフが主導、もしくは、大学のスタッフが就いている役職です。青が学生主体、もしくはは学生自身が役職に就いていることを表しています。

まずプログラムが5つあって、競技レベル的には、左が一番競技レベルが低い、右に行くほど競技レベルが高くなるという表になっています。なので、マイライフスタイルは、例えばヨガとか、スタジオでエアロビクスをやるみたいな、競技ではない場合もありますけれども、そういうものを示す一方で、右側に行けば行くほど、オリンピックで金メダルを取りましたみたいな子が所属をしていたりするプログラムです。それが、1つ上が上がっていただいて、それを運営している主体が誰なのかという話をしたいと思っています。

スポーツ・ディベロップメント・センター(SDC)という大学の組織と、スチューデントユニオンという、ちょっと特殊な体系を持っている団体があります。まずスポーツ・ディベロップメント・センターについて話します。スポーツ・ディベロップメント・センターは、恐らく日本でいうところのスポーツ局。学部ではないんですけども、学生にサービスを提供する、スポーツのサービスに特化した部署。ここに勤めている人は、大学のスタッフだけれども、教員ではないので授業は持っていません、という組織です。

おおよそこの大学にも、そういう組織があります。独立しているか、規模によっては個人であることもありますけれども、教員ではなくて、スポーツを運営するための人、ポジション、もしくは部というのがあって、ラフバラ大学の場合は、それが非常に大きいです。

例えば、SDCがやっている取り組みでいうと、ロンドンオリンピックの前に、チームGBがラフ

バラ大学を事前キャンプの場所を選んだんですけども、その誘致をやっているのはスポーツ・ディベロップメント・センターですし、レスターのサッカーチームのユースチームと大学生の試合のようなイベントを企画するのもSDCです。ここは、大学からお金が出ているプログラムになります。

次に、スチューデントユニオンについてお話しをしたいんですけども、ちょっとこれがややこしくて、どなたかご存じ、これを何か調べたことがある、実は知っているという先生はいらっしゃいますか。スチューデントユニオンというのは、大学生が学費を大学に払います。その中で何割かが、スチューデントユニオンという法人に渡されて活動をするチャリティー団体です。大学に付随しています。

鈴木：日本の大学だと、入学手続きのときに、生協にお金を払う。

川部：そうかもしれません。

鈴木：多分、そういう感じですね。

ありがとうございます。生協に、多分すごい似ていると思います。というのは、そのスチューデントユニオンが何をするかということ、それこそ生協みたいな場所があるんですけども。

鈴木：食堂とか、クラブとか。

川部：そうです。その運営を一任されている組織なんですけれども、イギリスの大学は特に、スチューデントエクスペリエンスを良くしようというのは、おおよそここが主体になっていることが多くて。ラフバラ大学とか、結構どこの大きな大学ではどこでもあるのが、そのスチューデントユニオンがクラブを何個か持っていて、その運営もここがやっていたりとか、値段や提供するサービスを決めることもやっています。

そのスチューデントユニオンが、ここに AU とありますけれども、ここが BUCS になります。BUCS の登録やお金の支払いをしたりとか、うちの大学は、この時期は何々があるから、こういうふうにしてくれないかというような交渉は、全てスチューデントユニオンが主導しておこなうものになっています。

インタビューではおおよそその大学でそうだと聞いているんですけども、スチューデントユニオンにはその大学の卒業生が新卒で雇用されます。彼らがそこに勤められるのは、最長 2 年までと決まっているので、自分は大学に行ったときにこういうふうにやりたい、ああいうふうにやりたいという思いのあった子たちが、ここに残るんですけども、その第 1 次審査が、学生の投票なんです。生徒会の投票みたいなイメージですけども、卒業していく子で、俺は、スチューデントユニオンの何というポジションに、自分はなりたいですというようなアピールがあって、誰かが選ばれるというふうになっています。

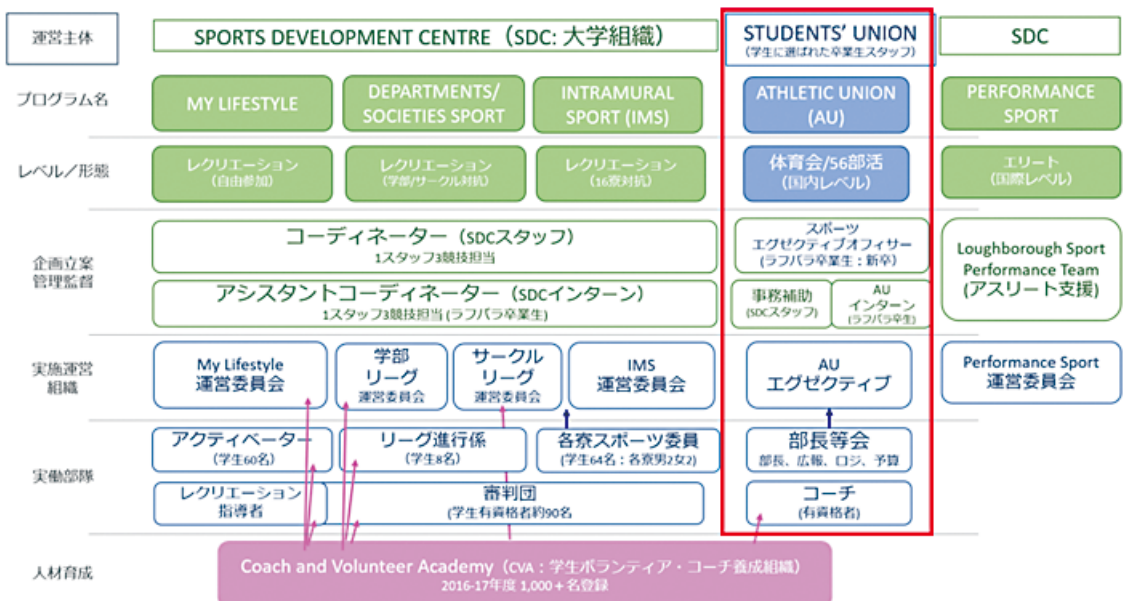
スチューデントユニオンの中には、幾つかポジションがあって、エデュケーションであったりと

か、ソサエティーといった、文化系のサークルとか、文化系の部活であったり、BUCS のアスレチックユニオンだったりというような形です。スポーツ・エグゼクティブ・オフィサーという子が BUCS を担当していて、スチューデントユニオンの中で、スポーツの予算はいくらと言われた中で、どこのチームを何人、1 年間で登録していきましょうというのを、全て判断して運営をしていくという形になっています。

ここで見たいのは、このスポーツ・エグゼクティブ・オフィサーが、お金をもらっているという意味では、大学のスタッフというか、スチューデントユニオンのスタッフではあるんですけども、学生出身ということで、学生の意見を反映しやすいということになります。

立場上、組織図上は、その下に付いている 2 人が大学に雇われている人で、特に事務補助の SDC スタッフは、社会人経験のある方が、新卒のスポーツ・エグゼクティブ・オフィサーが BUCS 運営をきちんとできるように、サポート的な立場だけでも、経験値としては上という方が、ここに就いています。BUCS のプログラム

ラフバラ大学におけるスポーツ機会の創出モデル



を生かして物事を行っていくというのが、このスチューデントユニオンの下にあるアスレチックユニオンになります。

今度は左に戻りまして、スポーツ・ディベロップメント・センターが行っている、この3つのプログラムについて、お話しをしたいと思います。一番競技レベルの低いマイライフスタイルというのは、例えば、初心者の子たちがサッカーをやるとか、クリケットをやったことがない子たちがクリケットをやるといようなことを念頭に置いて、本当のレクリエーションレベルで、何時にどこでやりますというのだけがあって、何かが起こるのを待つというような形のプログラム。

それから、次に右に移って、デパートメント、もしくはソサエティスポーツは、学部対抗、もしくは文化系の部活の対抗の試合を組むプログラムです。それが、マイライフスタイルの次に比較的競技性の高いとか、少なくとも競争をさせるという、1年間で何らかの順位をつけて、デパートメントだったら、大体スポーツ学部が勝つんですけども、そのスケジュールを組んで、学校の場所を押さえてといるのは、デパートメント・アンド・ソサエティ・スポーツです。

その隣のインターミューラルスポーツというのが、イギリスの非常に特異なIMSというプログラムなんです。ハリポッターで、寮対抗でクィディッチをやるといふくだりがあったんですけども、いわゆるそれのことで、寮対抗のスポーツです。何でも寮対抗でやるのが、イギリスは非常に多くて、例えば、今週のごみ拾い大会みたいなのがあって、順位もつけたりとかします。そうすると、勝った寮には、スチューデントユニオンからご褒美として、クラブタグとか、今週はビールが半額でいいみたいな特典があって、それで盛り上がっていくといような。もちろん寮に入らない学生もいるんですけども、1年生、2年生は、大体みんなが寮に入りたがるんで、イギリスの大学の始まり方という意味では、インターミューラルスポーツが一番盛り上がっています。

特に、スチューデントユニオン、アスレチック

ユニオンに入りたかったんだけど、競技レベルが足りなくてあぶれてしまったみたいな子たちが、一躍活躍するのがこの場です。もちろんBUCSに出ている子も、インターミューラルは出ていいんですけども、どうしてもタイミング的に出れないこともありますので、競争性のある競技に意欲がある子はインターミューラルで解消するといようなことをやったりもします。

一番右のパフォーマンススポーツは非常に特殊なので、ちょっとここでは割愛したいと思うんですけども、いわゆるエリートアスリートで、ラフバラ大学に在学している子たちの、どういうふうに学業と両立していくかというのを支援するといのものもSDCが行っています。

肝心なところがこれからなのです。これらのプログラムが、大学のスタッフだけで全て運営していくのには、ちょっと数が多くて無理がある。特に目標としているのが75%の皆さんということだと、スケジュールまでは決められても、実務レベルで課題が出てくる。これを、ラフバラ大学はどういうふうに解決しようとしているかといのと、学生にやってもらうという手を使っています。

ここで出てくるのが一番下の、コーチ・アンド・ボランティア・アカデミー、CBAというボランティアコーチ養成組織があります。当時は、1,300人の登録がありました、と聞いています。これは、基本的には何かイベントを運営する、それから、広報を担当するとか、スポーツ医科学でサポートするとか、幾つかのプログラムに分かれていて、自分に興味があるところに幾つでも登録をしています。例えば、特に次のウエズデーにはこういう仕事があります、来てくれる人、といような感じで、幅広く連絡をして、それに参加できる人が、ファースト・カム・ファースト・サーブでそれを埋めていくような形になっています。

肝心なのは、ここで定期的にセミナーとかトレーニングの機会があって、それに行くと、コースによって、何かを達成しました、完全にセミナーを何個クリアしたので、あなたはこれの資格がありますとか、何時間ボランティアをやったので、

あなたは今年度はゴールドボランティアでしたというようにものを学長の名前で、サーティフィケーションとして出してあげるといふプログラムなんです。そうすると、それを実際に履歴書に書いて、自分はこれにこれだけの時間をかけてきちんと育成してもらいましたということ、対外的に見せることができる形になっています。

ものによっては、競技団体のセミナーに行ってきたさいということもできますし、他の大学で審判が足りないことがあったときに、そのセミナーを受けてきた子で、きょう審判ができるということがあれば、交通費はラフバラ大学が持ってあげるから、君はどこそこの BUCS のウエズデーに行つて、審判をしてきてくれるかい、というふうな話ができます。

特にコーチだったり審判だったりというのは、何時間、その職に就いていないと次のステップに進めないというようなことがライセンシングであつたりするので、そういう意味では、競技レベルが、もし BUCS ウエズデーだったらそこまで高くはないですけども、それを積み重ねていくことで、これだけの実績はあります、次はここに行きたいということの足掛かりを、少なくともつくつてあげることができるという仕組みになっています。

なので、ここに登録をしている子が、この下の青いところに、おおよ派遣されていくようなイメージです。これを使って、大学が組んだこういうプログラムがあるんだけど、それを運転しましょうという形になっています。

一応、人海戦術はうまくいっているんだという話を、ラフバラ大学の SDC の人はして、目下の悩みは、物理的に場所が、もう足りないという話をしていました。先生方がラフバラ大学に行かれたのがいつ頃の話だったか、ちょっと分からないんですけども、私が行つた当時は、8 個目か 9 個目のサッカー場をつくらうとしていたぐらいなんです。どんどん広がつて、これでも足りないということだったので、今後どうするかは考えていかないと。やっぱり 75% はちょっと

多かつたんじゃないか、みたいなのところもあるよつでしたけれども、そういう話をされてついました。

英国における大学スポーツ

最後のまとめで、ちょっと大雑把な部分で、また主観もちょっと入つている部分も、ひよつとしたらあつたかもしれませんが、イギリスの大学スポーツで一番特徴的なのは、やはり、競技レベルを問わないで、幅広く大学生のコミュニティ全体に呼び掛けることのできるプラットフォームを築きつある、もしくは大学によつては、既にそれが築かれてついるという部分だつと思うんです。

NCAA とかですと、恐らく、NCAA に登録をしている子たちにしか語り掛けることのできないけれども、BUCS を運営しているのが学生出身の誰かであるということを見ると、そこからさらに、今、現役の学生さんに伝えられる力を持つている子たちが、各大学に、それぞれ 1 人ずつはいるということになりますので、そういう意味では、つなりの威力は非常に強いんじゃないのかなというふうに思つます。

エリートスポーツですとか、競技力向上という観点から見たときに、それからビジネス産業、芸術産業、スポーツ産業の観点から見たときは、BUCS の仕組みは、そこまで大きなインパクトを持つものではありませんけれども、大学を卒業してからもスポーツを続けていくとか、日本ですと、特に高校を卒業してからスポーツの実施率が非常に大きく落ちますので、そういう意味では、どうついうレベルでもいいから楽しくスポーツを続けていこうという働き掛けの意味では、非常に有効な形で運営がなされているのではないかと思つています。

そういうネットワークを持つているので、例えば何年か前に、国の調査の受託を BUCS がしてついました。大学のスポーツ実施率の向上と、その効果の検証というプロジェクトがあつたので、BUCS 自身で受託をして、各大学に協力を呼び

掛けながらその調査を進めていくという新しい動きもあります。

大学生をターゲットにしたい社会的な活動、例えば、メンタルヘルスを向上させたいというような呼び掛けであったり、インクルーシブネス、ダイバーシティーをもっと考えていこう、というお話しをしたいときに、1つの大学だけではなくて、全ての大学に等しく話し掛けられるという意味では、BUCSは非常に強力なつながりを持っているのかなと思いますし、この大学スポーツというコネクターがあるというのは、非常に力が強いというふうに思いました。

競技団体との大学の連携というのは、まだ始まったばかりというか、事例としては数が比較的少ないほうではありますが、その中で、大学生が欲しがっている雇用の機会であるとか、それにつながる何かという意味では、その連携がきちんとあって、少なくとも機会として、何かを経験できるというものをつくることのできるというのは、今後、この大学生のコミュニティーは、人数だけで見るとかなりの大きさ、ボリュームがありますので、ここでつながっている、つなげることができたということで、今後、イギリスの社会全体の行動変容にも、大きく貢献をさせることができる、BUCSにいた世代が今後外に出ていったときにも、そこで得た何かが大きく作用していくのかなと考えています。ありがとうございました。

《質疑応答》

坂上康博：お聞きしたいことがいっぱいあるかと思えます。どこからでも。

鈴木：最初にちょっとお話しされていたとは思いますが、スチューデントユニオンという母体があったこととか、イギリスの大学で以前から行われていたことが、BUCSの役割にすごく影響していると思うんです。

そういう意味でいうと、BUSAのときから、

何が変わったポイントなのか、なぜそういう変化が要請されたのか、教えていただけないでしょうか。

川部：2つ目については、分からないというのが正直なところですが。BUSAから変わったポイントとしては、大学スポーツの担当者ネットワークの、UCS (University and College Sport) という団体が、BUSAとは別に、当時あって。BUSAというのは、競技を運営することだけに特化をしていたんです。それを受け取る側（大学のスタッフ）のネットワークとは、つながっていなかったのだという理解なんです。

これは全て想像の域を出ないのですが、今BUCSが大学に対してやってあげているサービスのうちのどこかしらは、ひょっとしたら、かつて大学がやっていたんじゃないかと思うんです。それを巻き取る形でBUCSをつくったんじゃないかと。UCSという大学のスポーツ担当ネットワークというものがあったということは、そこで抱えていた仕事はきっとあるはずなんです。それが合体したということは、それを引き取ってBUCSになっているはずなので。そこまで細かく調べていないので、きちんとした答えになっていなくて、大変申し訳ないのですが。

岡本純也：BUCSがゲームのマッチングやどの大学がどのリーグに配分されるかというような差配を扱っていることは興味深いですね。日本の場合にはリーグ間の入れ替え戦があって、上下の動きがある。けれども、イギリスではBUCSがゲームのマッチングや全体のスケジュールを組むのに特化した組織としてある。そうすると、あまりたくさん的人的労力が必要ないから、かつては、例えば学生のボランティアで賄えるような小規模な組織としてあったのではないのでしょうか。

グラスゴーに留学していた際に、ハイランドゲームズというトラディショナルスポーツの運営について調査をしたことがあります。その統括組織はとても少人数で、個人宅に事務所を置いて運

営していました。運営スタッフの仕事は、やはりゲームマッチング、大会のスケジュールリング。

英国のアマチュアスポーツにはそのような伝統があるのでしょ。それぞれの競技の統括組織は参加者が楽しめるようにゲームのマッチングやスケジュールリングを行う。BUCS もそのような英国スポーツ文化の伝統の上に成り立っているとの印象を持ちました。

川部：今、これはかなり古い資料で、ちょっと私も読まないといけないんですけども、BUCS の歴史について私が寄せ集めで書いたものですけども、恐らく大学間で競技は始まってしまっていた。で、団体をつくりましょうという話になって、最初は UAU というものがつくられたようです。

その時は、ユニバーシティと専門学校がばらばらに、あとは女子と男子が分かれているとか、似たようなものが幾つかできてしまったと。それを統合するという動きが、片やありました。そういうものがあって、それがいろいろ統合された結果、BUSA になっているはずなんです。

ユニバーシティーズ・フィジカル・エデュケーション・アソシエーションが、多分最初なんです。それが UCS になったということになっているので、当初は体育教育の集まりだったと考えられる、と私がいっているのは、名称を見る限りということなので、何も基づいていないんですけども、もうちょっと調べてみないと分かりませんというお答えになります。

坂上：BUCS になった時点で、全体的に大学の公的関与が強まったり、バックアップ体制が強化された、みたいなことはあるんですか。

川部：恐らく、人材育成のプログラムは、非常にやりやすくなったんだと思います。単純に競技をやることはすでに始まっちゃっているから、何とか管理しなきゃ、スケジュール管理をしてあげないと、全部できなくなっちゃうでしょ、というの

で出来上がったものを、最終的に統合した形になっているので、それに付随する付加価値的な人材育成のプログラムは、恐らく BUCS にならないとできなかったことだったんじゃないのかなと思います。

岡本：スチューデントユニオンの活動というのは、スポーツ以外の課外活動なども同様にサポートするような形になっているのでしょうか。

川部：例えば、大学が行うコミュニティーサービスみたいな、町の老人ホームに出店しますとか、どこの清掃活動をやりましょうというようなコミュニティーサービスは、スチューデントユニオンがやっています。あとは、ソサエティーのサークルの活動費を出しているのも、スチューデントユニオンになります。

例えば、ジャパンソサエティーを最近つくった子がいるんですけども、その活動を支援するために、力を貸してくれたりとか、もしくは、そのソサエティーを集めて、インターナショナルデーみたいなイベントを大学の中でやって、留学生からこういうことを学びましょうとか。それがグローバルの一環だったり、というようなことを企画して運営しているのが、スチューデントユニオンになります。だから、おおよそ学業以外の大学の中でおこなわれているイベントごとというのは、スチューデントユニオンがやっていることが多いです。

スポーツを大学生がやるというのは、少なくともかなり前からあったことではあると思うので、スチューデントユニオンというものを形にしているこういうときに、当然スポーツもそこに入るのでしょ、ということだったのか、元々スチューデントユニオンというのが念頭にあったのかというのは、ちょっとわかりません。

鈴木：私が留学していたグラスゴーに GUSA という組織がありました。GUSA のプレジデントが、私が所属していたラクロス部の部員だったの

ですが、彼は選挙で選ばれたと言っていました。だから、学生組織なんですよ。

川部：基本的には。人気勝負みたいなのところも、だいぶあるので、在学中からもう、将来的にああいうふうになりたいから、あそこに顔を出す。選挙活動みたいな感じですよ。

中村英仁：2つお伺いしたいんです。まず、NPO的な組織なんですよ、誰が出資者みたいになっているのかは分かっていますか。2つ目は、それぞれたくさんスポーツがあるというのは分かったんですけども、人気のスポーツはどれか、例えばテニスが一番登録者が多いとか、競技別のデータはあつたりするんですか。

川部：まず、BUCSの法人格の話なんですけれども、厳密にいうと、CLG（有限責任保証会社）です。カンパニー・リミテッド・バイ・ギャランティー（Company Limited by Guarantee）という形態で、ソーシャルオーガニゼーションというんですか、こういうことを研究されていらっしゃる先生がいらっしゃると思うんですけども、非営利の会社なんです。株式を発行しないで保証金を拠出してつくられたというような形がってます。

中村：でも誰かが保証金を出しているんですよ。

川部：CLGという法人格と、登録チャリティーというステータスも持っているんで、彼らは、自分たちがどういってお金をもらって、こういうことに使って、これは本来目的にかなっているんで、収益ではないみたいなことを報告する義務があるので、それをさかのぼっていけば、それは確実に見ることができます。そのデータはないんですけども、さかのぼれば見ることはできると思います。

あと、BUCSの報告書が、彼らのウェブサイトに載っているんで、何人登録してという、競技別のものがどこまで出ているのかはちょっと分か

らないですけども。ただ人数でいうと、やっぱりどうしても個人競技が数が多い可能性はあるので、人気があるというのは、競技人口が多いという意味なんですか、それをどういうふうに数えるか……。

中村：プレーヤー、BUCSに登録して活動したプレーヤーが何人かというのを知りたいです。要するに、登録者数とUK全体のスポーツ人気は関連しているのかとか。例えば、サッカーやラグビーは実はプレーヤーも多いとか、あるいは逆に、登録者と人気はあんまり関係ないとか、そういうのが知りたいとちょっと思いました。

川部：単純に、各大学で複数軍を持っている競技、サッカーとラグビーは多いと思います。ラフバラ大学だけで、確か7軍、8軍まであったんです。バース大学とかバーミンガム大学とかも同じような感じでしたので、恐らく人数的には、やっぱり多いとは思っています。

中村：こういう団体があることで、例えば、スポーツやりたいからやろうぜみたいな集まりサイクルができると、するスポーツの参加者増加の循環が回っていきやすいのかな、と思ったので、そのような質問をしました。

日本って、プレーを見る機会が仮にあったとしても、プレーする機会はないものがあります。特に社会人ラグビーなんかは、一般的なサークル的ラグビーというのがすごい機会が少ないです。高齢者がラグビーをする機会というのはすごい貴重だ、と日本ではニュースになっていたりするんです。今のは高齢者の話ですが、スポーツをずっと続けていく機会が、UKでどうつくられているのかなというところと、少し関連しているのかなという感じがしました。

川部：スポーツを始めるきっかけに、BUCSがなっているかという意味だと、いわゆる単純に競技人口が多いものというのは、恐らく前々から

やっていた子たちが多いので、大学での競技人口が多いということになると思うんです。大学で競技を始めるようなものというのは、ある程度限られているのかなとは思いますが、

大学によっては、事例に挙げた野球ですとか柔道ですとか、そういうことができる大学もあれば、そうじゃない大学もあって、ラフバラ大学なんかでも、野球は場所がないのでクリケット場でやってもらっていた、とかもありますから、たまたまそこでアクセスがあったので、と始める子もいるでしょうし。

BUCS を始めるために競技団体がそれを使うというのは、あまり聞いていないけれども、タイミングは合わせているのかな。さっき言った、競技人口を増やしたいので、競技団体 (NF) と連携という話は、学期が始まる時にやっていたという印象はないんです。学期が始まるタイミングでは、とにかく新歓というんですか、うちのクラブにおいでよというのがあって、そのあとしばらくして体験会として、バレーボールをやってみませんかというのが学期半ばぐらいに行われて、相当楽しければから替えるみたいなことなんだと思います。

鈴木：私の印象では、イギリスの場合は、大学のスポーツというのはおまけなんです。真面目にスポーツをやりたい人にとって、「大学に入って、スポーツをやるぞ！」みたいな、アスピレーションの対象じゃない。日本の大学でいうと、サークルレベルです。

坂なつこ：観客料を取れるほどのものではない。

坂上：同好会レベルですね。

鈴木：元々そういうものだったのが、多分ちょっと厚みが出てきたから、こういう動きになってきたのではないかというのが、僕の想像です。BUCS になったというのは、パフォーマンススポーツの図のピラミッドで下から 2 番目だった大学スポー

ツというカテゴリーが、ちょっと大事になってきたから。日本の大学スポーツだったら、もっと上に来るんじゃないですか。

中村：だから、日本だったら NCAA みたいな話も出てくるし、みたいなイメージですよ。

坂：競技力自体を査定するものを配るなどの連携はないのですか。

中村：サークルが組織化された。

坂：大学も魅力が欲しい、スポーツ団体でももう少しちょっとちゃんとした組織が欲しいということによって、それぞれの共同関係がよりスムーズになったということではないのですか。

川部：あると思います。特に、スチューデントユニオンが、サティスファクションの部分、学術以外のところを大きく持っているので、その機会をもっと増やしていこうとか、そこに入りたいと思っていない、それこそデザイン学部とかの子たちにも語り掛けられるような何かをという意味では、それも含めてスチューデントユニオンで動けるので。サティスファクションが出て一番喜ぶ部署はユニオンなんです。

坂：そこがしっかりしているという評価になる。

川部：そうです。もちろん学術系が良かったという方も、もちろん考えられるんですけども。

中村：もうちょっと分かりやすくいうとこんなかんじでしょうか。サークル活動をしたい／すると考える学生が大学に入学する。わたしは勉強をしたんだけど、たまに運動をしたいかな、みたいな学生です。その人が、BUCS があることによって、この大学はいいところだったな、みたいなふうに思えるみたいな。

川部：それが必ずしも BUCS ではない可能性はあります。だから、ラフバラ大学みたいに、BUCS はここにあるけれども、それ以外のレクリエーションの活動もできるところまで手が回っている大学もあると思います。BUCS のトライアルに行ってみたけれども、これじゃなかったということもあったときに、その下の受け皿ができています。ここまでできているラフバラは、比較的特殊な例だと思います。

鈴木：多分、日本の学連ほど組織化された、学生で運営を回す組織みたいなのは、きっとなかったんだろうなと思ったんです。だから、BUCS がスポーツでボランティアをすることをオーソライズするというところに価値があるというか、日本でいえば就職活動で「学連で役員をやっていました」みたいなことを言えるようにさせてあげるといことですね。

BUCS がそういうアピールができるようなトレーニングとか経験のためのプレースメントの場所をつくっているということですね。全国の大学スポーツを取りまとめる組織が認定する経験として履歴書に書ける状況をつくっているということですね。

川部：そうです。

鈴木：日本だったら、学連で役員をやっていましたみたいなことを、多分、就活で言うんだけれども、何か閉じたところでやっているイメージもある。ただ、さっき言ったように、日本は大学スポーツをすごく真剣にやるから、就活でこれをアピールポイントとして使う人がたくさんいる。

これに対してイギリスではそこまで力を入れてやっている人はいなかった。さっきの GUSA のプレジデントだって、大したことをやっていないようにみえましたから。だから「スポーツは大切」ということを外向けにアピールするときに、フォーマルなポジションをつくってあげることの相対的な価値が高いんじゃないか。

そうだとすると、日本で今からやることには、そんなにインパクトがないかもしれないなと思いました。

川部：スポーツをやっている人には分かる価値だけれども、それをやっていない人には、それがどれだけすごいことなのか分からないというのは、イギリスでもある程度はあると思います。

ただ、だんだんどこでもそうってきていると思うんですけども、スポーツのことだけやっても、これ以上どうにもならないというところに、ある程度来ていて。例えば、イギリスの場合、例えば、スポーツで広報をやってきた人が抜けたところに、広報畑で出てきた人がぼんと入ってきて、広報の人がスポーツをやるといようなことが増えてきていると思うんです。

ラフバラ大学の場合も、ボランティアか、必ずしもスポーツ学部の子だけではなくて、ジャーナリズムの学部の子がスポーツに入ってきてウェブサイトを作りました、あれをやりましたとポートフォリオを作って、それを持っていくというようなことができるようになっていっているので。多分、学連だと、その競技のやってきた子たちの中でだと思うので、スポーツ以外のところの観点を持っている人と触れ合う機会があるという意味では、どんどん幅が広がってきているというのは、あるのかなとは思っています。

鈴木：健全だと思います。

岡本：恐らく、流れとしては大学を取り巻く社会経済状況のグローバル化とも連動しているのではないのでしょうか。グローバル化の中で、大学におけるスポーツは、どのような意味があるのかというようなことが問返される。その問い直しの中で「人材育成」や「市民教育」といった意義が言語化され、制度的に大学の中に、また、大学間をつなぐ制度として位置付けられていった。そのようにも考えられます。

一方で、90年代から2000年代に進んだ、大

学間のグローバルな競争の激化とも関係しているようにも思えます。

川部：今回はラフバラ大学の件だけでしたけれども、幾つか大学を訪問するに当たって、パフォーマンスで強い大学と、スポーツ研究で評価をもらっている大学と、スポーツの学部教育で評価を受けている大学というの、見ていったんです。パフォーマンスがいいからそれが研究業績に生きているかという、やっている部署が全然違うので、必ずしもそこに直結しているわけではないので、一緒にやろうという動きがあるかどうかというのは、大学の戦略にもよると思うんです。

大学のスポーツが、学校のグローバル化にどこまで関係があるかというのは、ちょっと分からないですけども。

岡本：元々自然にある、自分たちの文化として共有され、自動的に回っているような慣習的行為に対して、何でこれがここにあるのだろうか、何でこういう形に成り立っているのだろうか、ということ再帰的に（自己をモニタリングしながら）問い直す、そのような意味でのグローバル化（再帰性）の影響です。

イギリスの伝統的な大学の文化の中に学生のユニオンがあって、学生が交流している。では、それがなぜここにあって、今後の大学の在り方の中でそれは残すべきなのか、どう展開したらいいのか、効率化を進めるにはどうしたらいいのかといったことが問われる。現在、大学から予算がついているけれども、それを増やすべきなのか、手を引くべきなのか、大学の組織から切り離すべきなのかということも問いとして浮上する。そのようなことが問われる全体的なグローバルな構図の中で、活動が見直され、明確に位置付けられなくてはいけなくなった。今までは伝統の中で慣習的に継続されていたものが、明確な制度として位置づけられていく動きがあったのではないのでしょうか。

川部：ユニバーシアードをやっている団体との窓口が BUCS なので、例えばヨーロッパがこういうやり方でやっているのに、イギリスはどうなんだろう、というような問い掛けを受ける。ただ、大学の中では、パフォーマンススポーツに出ていくような子以外は、特にその問い掛けを受けるようなことには、今はなっていないんです。なので、どちらかという、ハイパフォーマンスを育てていくような、UK スポーツだったりとか、各競技団体で、メダルを目指してと考えている人たちが、大学スポーツをもっと使っていくべきだと思っているのかというほうに、話がいくのかな、とは思います。大学スポーツの中、各大学の中で、今のやり方がどうだろうという問い掛けを、正直、ちょっと気にしていないのかなというふうには思います。

何回か、幾つかの大学と話をした中で、NCAA では、例えば、GPA を幾つ以上じゃないと出場できないという決まりがあるけれども、BUCS もそうするような考え方はあるのか、それをやると思う？みたいな話をした時は、そんなのを入れたところで、別に競技人口が増えるわけでもないし、何でそんなことをしなきゃいけないのか、とか。多分、スチューデントユニオンの考え方に戻るのかもしれませんが、スポーツというのは、大学生が自分の余暇の時間にやるアクティビティーの一つであって、例えばバイトのやり過ぎで単位を落としたり、大学がわざわざ出ていって、お前はバイトを辞めなさい、バイトにはならない、みたいなことを言わないのに、なぜスポーツだけそんなことをするのか、という話をした大学もありました。

例えば NCAA だと、パフォーマンスアスリートのライフスタイルを支援してあげる部署や、そういう担当の人がスポーツ局にいないことが比較的多くて、それはなぜかという、成績を頑張れよというほうが言いやすいからという話があった。それをどう思う？と聞いたら、なぜそれをスポーツ局は自分で言えないの、と話していた部分もあるので、パフォーマンススポーツを大学ス

ポーツの中から生み出そうという発想は、恐らくあまり大学側には今のところなくて、それこそ伝統的なしつらえとして、それは大学が行うものではない、という話になると思うんですけども。

日本の場合は、もっとそれが特殊な、競技によって大きく違ったりとか、大学スポーツが非常に大きな意味を持っている競技もあれば、大学に来る前に、ピークの年齢が過ぎてしまう競技もありますので、そこら辺は、そのまま日本でやりましようとか、全体的にぼん、というわけには、当然いけないと思います。あくまでもこういうことをやっている国もあります、みたいな。こういうシステムをどうこうしましょう、というのは難しいです。

坂：ラフバラ大学は、ロンドンオリンピックで日本のキャンプ地になりませんでしたか。

川部：なるかもしれない時期がありました。

坂：ラフバラ大学は筑波大学と似ている。大学が一生懸命スポーツに力を入れて、パフォーマンススポーツのところを支援して、施設もこんなにあってみたいな形で、日本では紹介されるのではないかな、と。

川部：場所的にも、ちょっと似ているんです。都心から一本で1時間半ぐらいで行けるけれども、私は茨城の出身なので、これは言っても許されるんですけども、行くと、非常に田舎だということとかも、比較的立地的にも似ているというか、力の入れ方が似ていたりとか、実際に連携していろいろなプロジェクトを立ち上げたこともありましたし。

坂：運動生理学系の研究者がアスリートを支援するという事は、今、メディアでも取り上げたりしていると思うんです。さっきおっしゃっていたように、ラフバラ大学が特殊なのか、それともスポーツ科学部がある大学は、やっぱりそういう方

向に行くのか。

川部：ラフバラ大学は特殊だと思います。ラフバラ大学の4つのポリシーがあって、その中でもスポーツが入っているんです。それをやっている大学は、イギリスではラフバラしかないのです。スポーツが大事というのを、大学が組織として言っているのは、非常に特殊だと思いますし、ラフバラ大学はポリテクニクだった時から、そもそもスポーツが強かったんですね。その土壌があって、今こうなっているというのもありますけれども。

この体制が取れるというのは、やはり卒業生の中に、セバスチャン・コーがいたりとか、あちらこちらにいろいろな方が出ていて、そういう人を呼んだりとか知見を得たりとか。そういうことができるまで行ってしまったという意味では、他の大学がこれからそれを目指して、というのは難しいとは思うんです。

そういう意味では難しいのかなとは思いますが、同時に、大学というものが、これから何をしていくことができるかとなったら、やっぱりスポーツ科学の分野だと、いかにそれを一般社会に還元できるのかという話になると思うんです。そうすると、行く道はいろいろあるんでしょうけれども、ざっくり分けると、医療か、分かりやすいハイパフォーマンススポーツに分かれるのかなと思っていて。医療という意味では、健康、レクリエーション、政策的にはどちらかという、医療費を減らすことで寄与しますという話になるのか。それとも、ハイパフォーマンスのほうで、データを研究して、こういうことを専門的にやっている人間がいるので、という形。

いずれにしても、外部とコラボレーションをしていかないといけないという意味では、実際に、運動をする機会を提供し続けましょうということをやるのは、大学の中での取り組みであったりとか、学部の方での研究を続けていく。その意味では、実際にどこのスポーツをターゲットにして、どこのチームと連携して、データをチームの選手

に、もどしましようという話になってくると思う。

坂上：「75%の学生に週3回以上の運動」という目標設定は、ちょっと特殊な感じがしますが、一般的なのでしょうか。他の大学でもあるのでしょうか？

川部：ないです。

坂上：これも特殊。

川部：週3回運動をすることが良いという話は、スポーツイングランドか、スポーツ政策をやっているところが、これぐらいの活動をしてほしいというような話で週3回、となっているとは思えません。

何で75%としちゃったんだろうという愚痴はちょっと聞いたので、ここら辺を目指したいということだったんだとは思えます。ただ週3回というのは、週3回やるのが一般的に良いとされているということから出てきていると思います。

坂上：BUCSを下支えしているようなこういう動きが、イギリス全土に広がって根付いているのかな、と想像したのですが。

川部：全世界にやろうとしているのかどうかまではちょっと分からないですけども、今ある既存の大学対抗のものだけではなくて、各大学の中でやっている、よりレクリエーションレベルのほうへの支援も、BUCSは少なくとも視野には入れていると聞きました。

尾崎正峰：質問が2つあって、1つ目は今の話に関わるとは思いますが、BUCSの立ち位置と申しますか、BUCSと国のスポーツ政策の関係がどうなっているかということです。言葉を少し足せば、若年層のスポーツ参加という面では、ロンドンオリンピックをやっても、結局、増えなかった

という厳然とした事実があり、それを受けてスポーツイングランドとして参加率を上げるべくずっといろいろな施策をやっているわけですが、BUCSが行っているものが、そうしたスポーツ政策とどうリンクしているのか。資料として出していただいた収支の内訳を見ると、収入として公的な資金が入っているようにあまり見えないと思いました。このように、交付金、寄付金という形で国のお金がBUCSには行っていないということ、つまりは、お金のつながりがあまり見られないということは、国のスポーツ政策とのつながりがあまりないということ、それが現状なんではないかということをお伺いしたいと思います。

川部：ありがとうございます。おっしゃるとおり、数字に表れていないんですけども、プロジェクトとして、スポーツイングランドと一緒に組んでやっているプロジェクト、キャンペーンは、幾つかあります。

例えば、スポーツイングランドで女子のスポーツを促進しようというキャンペーン（This Girl Can）があって、それを大学の中に持っていくときに、結局実施主体は大学になるんですけども、そこへの周知の仕方として、BUCSにお願いをして、一斉に広めてもらうというやり方はあると思います。

ただ、お金の観点で、どういう流れになっているかというのは、ちょっと分からないんですけども。

尾崎：2つ目の質問は、BUCSのことと直接は関係がなく、ふと思いついたことなので恐縮ですが、先ほど述べられている大学のグローバル化という点でいえば、イギリスの大学も、かなり多国籍化が進み、いろいろな国の学生たちがいると思われませんが、イギリスのEU離脱によってEUの加盟国の学生たちの学費がはね上がるのではないかとされています。その結果、EUの国々から来ている学生たちはどうなるのか、入学、在籍できる範囲が狭まるのではないかと。そのことが、イギ

リスの大学のもっている“多様性”に関して、ひいては、BUCSに関して、イギリスのEU離脱は、今後、どのような影響を与えることになるのかという点です。

川部：留学生であっても、入学をする基準を満たして必要数の履修をしていれば、BUCSには出場ができるので。どちらかという、単純に在学人数が減ってしまうという、大学の抱える問題と、多分リンクしている部分はあると思うんです。でもBUCSだけが頑張っただけでどうかなる問題じゃないし、どうなるのか、結局1月まで分からないのかな、みたいなのところはあります。

鈴木：もう一回聞いてもいいですか。公的な補助金というのは、あるとしても、(グラフでいうと)助成金のところに入っている。だから、インパクトとしてはすごく小さいわけですね。

川部：そうです。

鈴木：私の感じ方が正しいかどうかも含めて、皆さんにお聞きしたいところではあるんですけども、完全に独立採算として回っていて、まず収入と支出がちゃんと1,000万円プラスというところとか、3分の2を会費と競技会とエントリー料、チームとしての参加費、大学としての参加費、個人としての参加費というので、競技会の運営と人件費というベースのところを回している。共同事業は共同事業、負債事業は負債事業、カンファレンスはカンファレンスで、対応がほぼあるみたいなのところが、ちゃんと一個一個の事業を(独立採算で)回る規模で、受益者がお金を出す、という形で回すふうになっているように見えるんです。

川部：私もそのように見えるんです。

鈴木：それは、日本のスポーツ団体と比べたらどうなんだろうと思って。少なくともマイナースポーツは補助金に頼っているんで、こうならない

はずなんです。ちょっと分からないんですけども、どのぐらいここから学ぶべきものがあるんだろうというのが1個。

もう1個は簡単で、さっきの中村さんとかのお話にも戻るんですけども、要はBUCSは、国がやりたかったんじゃないかとしたら、誰がやりたかったのか。誰かがやりたいと言ったはずだと思うので、それは誰だったのかなというのを(お聞きしたいんです)。

川部：後半の部分は、過去を振り返ると、大学対抗の競技大会が既に行われているのに、その統括団体がいないと、今あるコンテンツを受け取る皿がどこにもない、ということなんだと思うんです。それで、そのまま維持すればよいじゃないかとなっているんだと思う。

鈴木：そのまま維持したわけではなくて、私の最初の質問に戻るんですけども、BUSUと大学側のネットワークが並立していたところから、1個にしたほうが良いとなったわけですね。それを推進したのは誰だったのか、誰が制度変更の推進役になったのか、ということなんです。

坂上：誰が主導したかということ。

川部：改めて、それのお答えを、私は持ち合わせていないので、大変恐縮なんですけれども。

鈴木：このお話をいろいろなスポーツ関連の人にされた時に、ここに注目が集まったりはしなかったんでしょうか。こういう収支構造になっているのか、うちと全然違うな、みたいな。

中村：多分、日本と海外、特に西洋系の国との組織構造の違いなんですけれども、日本は機能別組織になっているんです。だから、要するに営業の人が全部集まっている、人事の人が全部集まっているとか、その中で、日本は部署というのはつくられているんです。

でも、西洋系の組織は、それぞれのユニットが独立採算みたいになっていて、その人材育成プログラムで収入を得て、その収入に基づいて運営する。その中に営業がいて、企画がいてとか、という形になっていると、今度は、もう少し細かい構造が、多分重要になってくると思うんですけども、そうすると、収入と対応しやすいです。

岡本：君の組織は、ここからお金を取ってね、それで回してね、と。それは納得いくね。

中村：そう、お金は取りやすいはずなんで。日本は逆なんです。機能別組織なので。

坂上：そこが根幹的に違っている。

鈴木：明瞭会計にならない。

中村：日本は絶対にならないです。

岡本：互いに弱いところを補い合う。

中村：それは、多分、そういう会計をガバナンスできるマネジャーがいない、独立採算にするところでという。

坂：そうすると、やっぱり参考にならないという判断になったという。

中村：多分そうでしょうね。

坂上：ビジネスを目指したからでしょう。それだと、何これは、という感じになってしまう。そこがネックになって、日本版 NCAA の議論の中に、それが加味されていかないということでは。それが一番の理由ということ？

川部：収益を目指していないからです。

坂上：収益ね。

川部：当初は、大学のスポーツでお金をもうけていく方法を考えましょうという議論に NCAA が出ていたので、イギリスでは大学同士のスポーツ交流を第三者が担う統括組織として BUCS というものもあるよ、という話はできたと思っていたので。でも、そもそも BUCS は収益は目指していない、根本的に違うじゃん、となって、話が終わった感じです。

鈴木：(収益を目指していないから参考にならない、というのは) おかしいです。だって、アメリカはそもそも大学がスポーツを収益事業としてやっているから、成り立っているわけでしょう。今、日本の大学でスポーツが収益事業になっているところはないでしょう。六大学野球はなっているのかな？ 日本では、できることをやりましょうというイギリスのような発想に、どうしてならないんでしょうか。

坂上：地道に、地に足がついた道のほうがやれると思うけれども。

鈴木：できないからやめようという判断も、できなきゃいけない。日本では NCAA はできないという判断をするつもりは、全くないということですか。

川部：分かんないです、誰かにあったかもしれないですけども。

坂上：具体的には、テレビの放映権料とか、スポンサーとか、ああいうものをいかに獲得するかという、そのモデルが欲しかったということですよ。ね。

中村：NCAA はそうだと思います。

川部：当時ということですよ。企画としてどういう案があるかというのと、全体の統括の仕組みとして、どういうふうにしていくか、というよう

なことが話し合われていたというふうに理解していますけれども。

中村：そういう意味では、日本のほうが、イギリスよりはできるかもしれないですね。

鈴木：一応、興業しているから。

川部：それぞれに違いがありますし、足並みそろえて何かをやってみよう、他でこういうふうに行っているからこれでいきましょうとは、絶対にできないものなのだと思うんです。

坂上：種目間の差が大きいということ？

川部：例えば、筑波のような大学がある一方で、スポーツのリソース的にそこまでないという大学もあるでしょうし、それも含めて、全体に響くお金のできる何かをつくらなきゃという出だしがあったときに、どこまでこれが参考になるのか。そもそもお金にならないんですけれども、こういう組織もありますという話ではあったんです。一度これを文章化して、本の一節にさせていただいているものがあって、東洋大の先生が、それをご覧になっていて、たまたま東洋でプレゼンする機会があったときに、あれの話は、他にどこかでまともっていないのですかという話を頂いて、今に至るので。

鈴木：面白い事例なので、もっと知ってもらいたいですね。

川田幸生：途中で、パラ系の競技が幾つかあるということで、陸上とか水泳とか、車いすバスケ、テニスということを挙げてくださったんですけども、この4つは、割と障害のある人もない人も一緒に施設や設備がしっかりしていれば、一緒にできる側面もあるスポーツのような気がしました。BUCSの中で、競技としては分かれているけれども、実態としては、障害のある人もない人

も一緒に活動しているというような形になるのか、やっぱり別々のものとして行われているのかという点を、少し伺いたいと思います。

川部：競技の中では同じ扱いです。点数の配分は競技によっていろいろありますけれども、車いすラグビーでどこが勝ったら何ポイント、それも含めて総合ランキングが最終的に出るという意味では、同列に扱われています。

川田：それをやっている人たちは、障害がある当事者か、そうじゃなくても参加できる、常にインクルーシブにやられているものか、障害当事者しか登録できないのか、という点はどうですか。

川部：具体の事例が分かるのは1つだけで、車いすバスケは、障害の有無にかかわらず、参加はできました。ちょっと、他の競技は分かりません。水泳は多分そういう対応はできないような気がするんですけども、陸上は、ひょっとしたら、車いすで走ってみたいという子がいたのかもしれないし、車いすバスケは、一緒にやってみようというイベントごとに、よく使われやすいものなので、一緒にやりたいという子がいて、それが実際にできるようになった、という話は聞いたことがあります。

坂上：ということでよろしいでしょうか。どうもありがとうございました。

[2019年10月29日 一橋大学佐野書院]